

□ オーケストラ

岩野 裕一

2022年は、新型コロナウイルス感染症の収束が期待されたが、年初来、オミクロン株が世界的に猛威をふるい、1月から3月には日本国内各地で「まん延防止等重点措置」が発令されて、公演中止やアーティストの来日中止を余儀なくされた楽団もあった。春以降は規制が徐々に緩和され、さまざまな感染防止対策をとることで、各オーケストラは例年に近い形で活発に演奏活動を行うことができたものの、いったん遡のいた高齢層の客足は回復せず、定期会員の減少に悩む団体も多い。

こうした中で、世界に強い衝撃を与えたのは、2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻である。舞台上でウクライナへの連帯や平和への思いを表明するアーティストが続出する中で、東京フィルの首席客演指揮者ミハイル・プレトニョフがロシア当局から忌避されて活動の拠点を国外に移し、日本フィルの芸術顧問アレクサンドル・ラザレフは、「日本滞在中、ロシアに残した家族の安全が確保できない」として来日を断念するなど、影響はわが国のオーケストラ界にも波及した。

コロナ禍とウクライナ問題は、急激な円安という形で日本経済に打撃を与えたが、それでもこのハードルを乗り越えて招聘される海外オーケストラが相次いだ。10月から12月にかけて、サイモン・ラトルとロンドン響、アンドリス・ネルソンスとボストン響、クリスティアン・ティーレマンとシュターツカペレ・ベルリンといった大物が相次いで来日、音楽ファンにとっては干天の慈雨となつたに違いない。

対する国内のオーケストラも、困難な状況の中で充実した演奏活動を展開した。

2022年に創立50周年の節目を迎えたのは、山形交響楽団と新日本フィルハーモニー交響楽団だ。山形響は4月の300回記念定期で創立名誉指揮者の村川千秋と常任の阪哲朗が揃い踏み、9月定期にはチェロのステイーヴン・イッサーリスがシューマンの協奏曲で極めつけの名演を披露した。一方、新日本フィルは佐渡裕がミュージック・アドヴァイザーに就任（2023年4月から音楽監督）、「クラシック音楽のすそ野を広げる」と宣言して、人気ピアニストの反田恭平をソリストに全国ツアーを敢行している。

また、創立75周年を迎えた大阪フィルは、2月定期と東京定期で音楽監督の尾高忠明がブルックナーの交響曲第5番を取り上げ、朝比奈隆の伝統を受け継ぐ覚悟のほどを示した。

いっぽう、30周年を祝った「セイジ・オザワ松本フェスティバル」では、サイトウ・キネン・オーケストラが恒例の夏の公演に加え、記念特別公演として11月にボストン響音楽監督のネルソンスを招き、マーラーの交響曲第9番で入魂の名演を聴かせた。小澤征爾総監督は、8月、11月ともにカーテンコールに登場して聴衆から歓呼の声で迎えられ、11月23日には非公開ながらベートーヴェンの『エグモント』序曲を指揮、その模様は映像で配信されて、衰えない音楽への情熱を世界に示した。

指揮者の動静に目を向けると、NHK交響楽団は、首席指揮者に就任したファビオ・ルイーダが9月定期でヴェルディの『レクイエム』をはじめ3プログラムで船出を飾った。東京ニューシティ管弦楽団は「パシフィック フィルハーモニア東京」に名称変更して新体制となり、4月から飯森範親が音楽監督に就任。5月定期でメイソン・ベイツの『マザーシップ』を日本初演、演奏に合わせたプロジェクトマップを活用するなど意欲的な活動を開始した。

2008年から京都市交響楽団の常任指揮者として黄金時代を築いた広上淳一は3月をもって退任、最後の定期ではマーラーの交響曲第3番を演奏予定だったが、コロナの影響で同第1番に変更を余儀なくされた。広上は9月からオーケストラ・アンサンブル金沢のアーティストティック・リーダーに就任している。大阪交響楽団は、常任指揮者・山下一史、ミュージックパートナー・柴田真郁、首席客演指揮者・高橋直史というトロイカ体制となり、7月には山下がポストを持つ千葉交響楽団、愛知室内オーケストラとの合同演奏会を大阪、愛知で開催。ストラヴィンスキー『春の祭典』を演奏して大いに気を吐いた。

札幌交響楽団は常任のマティアス・パーメルトに加えて、川瀬賢太郎が正指揮者、広上淳一が友情指揮者に就いた。群馬交響楽団は23年度から常任指揮者となる飯森範親がアドヴァイザーに就任、神奈川フィルハーモニー管弦楽団は沼尻竜典を音楽監督に迎えている。

以下は管見の限りだが、印象に残った公演を挙げると、東京交響楽団は9年目を迎えた音楽監督のジョナサン・ノットが、年10回の定期のうち5回を指揮した。特別演奏会のR・シュトラウス『サロメ』は歴史に残る名演（11月）。東京都交響楽団は、世界的に注目される26歳の天才指揮者クラウス・マケラを5年ぶりに迎え、ショスタコーヴィチの交響曲第7番『レニングラード』は、ウクライナの現実も重なって強烈な印象を残した（6月）。

東京フィルハーモニー交響楽団は、名誉音楽監督チョン・ミョンフンにとって初挑戦となるヴェルディ『ファルスタッフ』を10月の定期公演で取り上げ、演奏会形式ながらチョン自ら小粋な演技も交えての舞台は、聴き手に幸せをもたらした。日本フィルハーモニー交響楽団は、ラザレフの代役として秋山和慶が45年ぶりに東京定期公演出演を果たし（6月）、得意のフランス音楽でオーケストラからつややかな音を引き出して、楽団員、聴衆の双方から喝采を浴びた。

読売日本交響楽団は、5シーズン目に入った常任セバステイアン・ヴァイグレをはじめ、指揮者陣が充実。8月に客演したフィンランドの若手女流エミリア・ホーヴィングの澁漣たるシベリウスの交響曲第5番は収穫だった。近年、進境著しい東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団は、常任指揮者・高関健とのシベリウス交響曲第4番（9月）、桂冠名誉指揮者・飯守泰次郎とのシューマン交響曲第3番・同第4番（6月）で充実ぶりを示した。

セントラル愛知交響楽団は、常任の角田鋼亮が5月定期で大曲ブルックナー交響曲第5番に挑んだ。小編成を生かしての清新な演奏からは、両者の良好な関係が伝わってきた。大御所の飯守泰次郎とブルックナーの交響曲00番と0番を取り上げたのは、関西フィルハーモニー管弦楽団の3月定期。長い歴史を刻んできた両者ならではの凄まじい名演だった。

22年を「改革元年」と位置付けた日本センチュリー交響楽団は、ミュージックアドバイザー秋山和慶とのオール・プロコフィエフ・プログラム（10月）で鮮烈な響きを聴かせた。九州交響楽団は、9月のくまもと復興国際音楽祭に出演したケント・ナガノとマーラーの交響曲第1番を力演。10月には本拠地アクロス福岡のリニューアル再オープンを音楽監督の小泉和裕がマーラー『復活』で祝った。

日本オーケストラ連盟準会員の千葉交響楽団のブラームス（10月）、富士山静岡交響楽団のエルガー（7月）、中部フィルハーモニー交響楽団のベートーヴェン（9月）は、いずれも今後の成長を期待させる好演。また、連盟非加盟ながら、創立20年を迎えた愛知室内オーケストラが定期演奏会を一気に年間22回に増やし、音楽監督に山下一史を迎えて台風の目となった。同じく非加盟の神戸室内管弦楽団は、大阪特別演奏会でのベートーヴェン（6月）、神戸市混声合唱団との合同演奏会でのプーランク（11月）で秀演を聴かせている。